運河

運河

椎名麟三

新潮社版

河運

昭和三十一年五月二十一日　印刷
昭和三十一年五月二十五日　発行

定価　二五〇円
地方売価　二六〇円

著者　椎名麟三

東京都新宿区矢来町七一
発行者　佐藤亮一

印刷所　二光印刷株式会社

東京都新宿区矢来町七一
発行所　株式会社　新潮社
電話東京(34)代表七一一一番
振替東京八〇八番

（乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にておとりかえします。）

印刷　二光印刷株式会社　製本　新宿・加藤製本
© By Shiina. Printed in Japan

運

河

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第一章

1

昭和八年の十月の朝だった。田町の別所運送店へ、芝警察署の特高が入って行った。彼は、うす暗くてしめっぽい土間の隅の机に向っている親方へ云った。

「塚口洗吉さんという方いますか。」

小柄な親方は、まるい頓狂な眼をあげた。その眼には、おびえた色があった。彼は、初対面のひとには、いつもそんな眼になるのだ。特高は、その店主をなぐさめるように云った。

「ぼくは、塚口さんの友人なんですが。」

「ええ。」と親方はやっと答えながら、思案げに椅子から立ち上った。

そのとき、裏の倉庫から、勝手の土間を通り、店へ出ようとしていた洗吉は、思わず立ち止って、自分の友人と称する四十年輩の男を見ていたのである。洗吉には、もうそ

れが特高であることがわかっていたからだ。親方は、倉庫の方へ彼を迎えに行こうとして、びっくりしたように洗吉へ云った。

「おう！　塚口、お客さんだぜ。」

洗吉は、店へ出て行った。特高は、にやにや笑いながら云った。

「塚口！　おれだ。」

洗吉は、罪深げに答えた。

「ええ。」

「ちょっと表へ出よう。」と特高は云った。

洗吉は、何となく汚れたシャツにズボン姿の自分を見廻すようにして云った。

「このままで？」

「ああ、ちょっと立ち話するだけだ。」

そして特高は、店主へ挨拶もせずに表へ出て行った。洗吉は、仕方なさそうにその特高の後からついて行った。その彼は、親方の不審な眼を背後に感じていた。第一、背広姿の堂々たる四十男と、二十四歳の見映えのしない青年とが友人であるなんておかしいにちがいなかったからだ。特高は、店の隣りの眼科医院の塀の前で立ち止った。そして

何かを見透すように洗吉を見ながら、相変らずにやにやしながら云った。
「いつから東京へ来ているんだ。」
「二タ月ほど前です。」と洗吉は答えた。
「あの店へは誰かのつてで？」
洗吉は、あわてて云った。
「いいえ、貼紙がしてあったからです、店員入用の。」
「でも知人がいたからだろ、東京へ来たのは。」
「いいえ。知ったひとはひとりもありません。」それから洗吉は、力をこめて云った。
「ほんとうです！」
特高は、急に白けた顔になった。彼は、しばらく眼に繃帯をした十五六の娘が、母親らしい女の背に負われて医院へ入って行くのを見送っていた。だがやがてやっと思い直したように云った。
「とにかく二三日のうちに警察へ来いな。主任さんも、お前の顔を見ておきたいそうだからな。」それから特高は歩き出そうとして念を押した。「知ってるな、芝の警察署だぜ。」

洗吉は、逃げるように店へ帰って来た。その彼は、意味もなく心に呟いていた。

『一か八かだ。……一か八かだ。』

親方は、机に向ったままきょとんとした顔で店へ帰って来た洗吉を眺めていた。何かが腑に落ちないようだった。洗吉は、その彼へ近寄って云った。

「あの倉庫の貨物、木挽町へ行くんですね。」

すると親方は、我に返ったように送り状を差し出しながら云った。

「ああ、蒲団包み、三個だ。」それから後めたそうな声で云った。「いまの奴、警察みたいに横柄な奴だな。」

瞬間、親方は自分の言葉にぎょっとしたような顔で洗吉を見た。洗吉は云った。

「あいつは、あんな奴なんです。」

「いやな奴だな。」と親方は呟いた。

それから親方は、ふいに黙り、思案気な顔で、ぼんやり机の上の請求書へ眼を落した。洗吉は、倉庫の方へ戻って行った。その彼は、背後に急に暗くなった親方の姿を感じながら、ふたたび熱っぽい声で呟いていた。

『一か八かだ。』

その数カ月前、大阪刑務所は、その裏門からやせたひとりの男を放り出した。それがこの塚口洗吉だった。彼は、関西の私鉄の車掌だったのだが、共産党員として活動していたために検挙され、警察や未決やらで二年ばかり暮した後、仲間と自分を裏切ったのである。つまり転向上申書を出して、執行猶予のお情にありついたのだ。この裏切者は、その後、姫路のマッチ工場でしばらく働いていたが、そこで胸をやみ、小さな事件を起して、未知と云っていい東京へやって来たのである。無論、彼の場合、その上京は、警察へ届けなければならないことになっていたが、彼はそれさえしなかった。彼は、おろかにも東京を自分の最期の地と考えていたので、そんなことは些事に見えたのだ。というよりも、自分自身を些事と考えていた、という方が正確かも知れない。だが、日本の警察網は世界に誇るだけあって、どんな些事も見逃さないで支配する自然法則のような権威をもっていた。それは、洗吉を東京でちゃんと発見していたからである。そして洗吉は洗吉で、上京の届を怠ったというだけで、この警察網から逃れようとする意志は、少しも持っていなかったのである。たとえ警察の支配を逃れ得ても、その時代から逃れられるはずはなかったからだ。その時代はこうだった。その年の三月に国際聯盟脱退の大詔が渙発され、四月には京大滝川事件があり、七月には神兵隊事件が発覚し、街に

は、絶望的な自嘲的な流行歌がはやっていたのである。

店の倉庫は、三坪たらずのバラックだった。新鮮な藁のにおいがぷんぷんした。昨日買入れたばかりの梱包用のむしろの束が、隅に立てかけられてあって、うす暗い闇のなかから鮮やかにうき出していた。それは古びたこの小さな店全体のなかで、新しいという感じのする唯一のものだった。洗吉は、埼玉からの定期便のトラックで来た蒲団包みをリアカーに積んだ。そのときその裏通りを、綿布問屋へ行っていた柳田が、自転車の後に、空のリアカーをガタガタいわせながら帰って来た。自転車は、その柳田の大きな頑丈な身体には、玩具のように見えた。彼は、洗吉を見ると、遠くから日やけした顔に白い歯を出して笑った。人の好さそうな笑いだった。彼は、自転車から降りると洗吉へ云った。

「ああ、しんどう。しんどいこっちゃおまへんか。」

洗吉は、自分の関西弁を真似られて、仕方なさそうに笑った。すると柳田は、豪傑めいた声で、アッハッハッと笑った。しかしその笑い声は、いつものような空虚なひびきがあった。洗吉は、その笑い声を聞くたびに、鉄道工夫の彼が飲食店の娘に失恋し、睡眠薬自殺をはかって病院へかつぎ込まれたという彼の過去を思い出すのだった。そして洗吉は、そのような人間の弱さなんて、もうたくさんだという気がしていたのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

洗吉は、自転車を走らせた。彼の使用にあてられている自転車は、柳田ともうひとりいる理窟屋の佐藤との三人の仲間のなかで、一番の古物だった。だから少し重いリアカーを引張ると、チェンがいまにも切れそうな錆びた音を立てた。洗吉は、思い出したようにズボンの後ポケットに手をやった。東京市の地図が入っていたからである。上京間もない彼には、東京は、全く不案内だったからだ。そして新橋へ来たとき、彼は、電柱に書いてある市電の停留所の、新橋という名を確めてから、右へ折れた。その彼は、またもや自分に刃向うように呟いていたのである。

『一か八かだ。』

洗吉は、不安だったのだ。自分が、いつも危険のなかを歩いている気がしていたのである。彼は、二ヶ月ばかり前、そこから逃げ出して来た姫路での生活さえすっかり忘れていた。今朝の特高がやって来たことさえ、その彼には思いうかんで来なかった。ただ、漠然と自分を卑劣な罪を犯した人間であるという感じ、そしてもはや人間としての資格を失っている男であるという感じがしていたのである。彼は、その自分へ抵抗するように強く呟いた。

『さあ、今度は、ここを曲るんだぞ。』

そして彼は、昭和通りを左へ折れて行った。

たずねあてた木挽町の配達先は、しもたや風な家だった。耳かくしの髪を結った四十ぐらいの女が出て来た。きれいな著物を著ていた。女は、荷物を見ると何か困った顔になった。洗吉は、かまわずに荷物を一つずつ玄関へ運び込んだ。女は、そのたびに彼へ何かいいたげな様子になったが、結局何も云えずに諦めたように、送り状を示しながら云った。

「判を押せばいいんですのね、ここへ。」

洗吉は、判をもらうとすぐ引返した。だがどう道に迷ったのか、いつまで行っても昭和通りへ出ないのだった。だが、彼は、上京以来迷うことに馴れてしまっていた。とにかく電車道へ出ようと思って、電車の音のする方へ自転車を走らせた。するとそこは銀座だった。著かざったひとがぞろぞろ歩いていて、露店もならびはじめていた。そのとき彼の前を走っていたバスがふいにとまったのである。そこが七丁目の停留所だったからだ。彼は、何の気もなくそのバスを追い抜こうとして、リアカーをバスの後のフェンダーにひっかけてしまったのである。同時にバスは、動き出していた。彼は、自転車もろとも横倒しになった。だがバスは、バックミラーにも映らない背後の出来事なんかわ

かろうはずもなく、平気で、自転車やリアカーごと洗吉を引きずりながら走りはじめたのである。その彼の身体は、重なった自転車とリアカーの間に出来た鉄の顎に銜え込まれていた。バスは速度を早めた。彼は、逃れようとした。しかしどうしようもないのだった。その彼は、何か厚い、何かやわらかくて強靱な壁のなかに包み込まれてしまった感じがした。同時にそれが自分のほんとうの姿であることをその瞬間に見た気がした。上顎のリアカーが、ふいに躍り上って彼の頭を打った。彼は、世のなかって何て不合理なんだろ、と思った。すると今度は何かが彼の足をねじ曲げると、路面が彼の頭を二三度打ったのである。彼は、ふいに楽になった。その彼は、何か眩いほど明るい世界のなかにいた。つまり気を失ってしまっていたのだ。

何分か後、洗吉は、びっくりしたように起き上った。頭がくらくらした。彼は、ひどくたくさんの人々に取りかこまれているのを感じながら、自分の求めるものを探した。求めるものは、そこにあった。リアカーは、自転車から引きはなされて、仰向けにひっくりかえっていた。そして自転車は、彼の足元近くに横倒しになっていた。ペダルが曲っていた。大したことはないと思った。だが気がつくとハンドルの部分がないのだ。あわてて探すと、遙か後に首でももぎ落された感じでころがっていた。洗吉は、何となく

首をさわった。
「大丈夫かい？」と誰かが云った。
バスの運転手らしい男が、にやにやしながら洗吉を見ていた。洗吉は、大丈夫なのか、大丈夫でないのかさっぱりわからなかった。だが、生きているのだから大丈夫なのだろうと思った。で、洗吉は、ぼんやり答えた。
「ええ、大丈夫だす。どうもすんまへん。」
突然、関西弁を笑う若い女の噴き出すような笑い声が起った。洗吉は、あのときと同じだ、と思った。だがあのときとは、どんなときだったか、考える力がなかった。運転手は、相変らずにやにや笑いながらやさしく云った。
「とにかく医者に見てもらおうな。」
「すみません。」と彼は云った。
運転手は、人ごみから洗吉を抱え出すようにして歩き出した。そのとき洗吉は、右足の甲がひどく痛むのに気がついた。見ると地下足袋がやぶれて、血でべっとりとしていた。運転手がふいに笑いながら手を振った。向うから来たバスの運転手へ挨拶したのだ、とわかった。そのとき洗吉は、はじめて自分の引きずられて行ったバスのとまって

いるのを見たのである。そのバスのとまっているのが不思議な気がした。そのバスは、客を下したらしく、空になっていた。

運転手は、小さな医院へ洗吉を連れて入った。洗吉は、ひとりで地下足袋を脱いだ。そして右足のそれを脱いだとき、地下足袋のなかにたまっていた血がだらだら漆喰へ流れた。見ると足の甲の骨が白くむき出しになっていた。運転手は、もう玄関へ上っていて、洗吉を待ちながら出て来た医者へ自慢げに云っていた。

「あの男が、後から自転車をひっかけやがったんですよ、車のフェンダーへ。」

洗吉は、運転手が自分のことをどんな風に云ったって仕方がないという気がしていた。運転手は、完全に無罪だったからである。

医者は、大儀そうに玄関脇のドアをひらいた。洗吉は、血を床へ垂らすまいとしながら跛をひいて、その診察室へ入った。医者は、椅子へ腰を下した洗吉の足をだまって見ると、看護婦に顎で何かを指した。すると看護婦もだまったまま机の上の、ニッケルメッキの容器をもって来ると、脱脂綿でその傷をぬぐいはじめた。医者は、その方は看護婦に任したという風に、はじめて口を利いた。

「ほかにどっか痛むところがあるか。」

身体中が痛んでいた。彼は、それをいった。すると医者は、厄介そうに云った。

「じゃ、裸になって見ろ！」

洗吉は、仕方なくシャツを脱いだ。医者は、ここは、ここは、と頭の方から指で押しはじめた。そのとき、玄関の方で運転手の誰かと話している声が聞えた。やがて運転手と同じ制服を著た三十すぎの男が入って来た。電車に勤めていたことのある洗吉には、事故係だということがわかった。男は、部屋へ入って来るなり洗吉へ云った。

「君は、自分の方がわるいということがわかっているな。」

洗吉は、背いた。事故係は云った。

「今日の手当は、会社の方がもって上げる。ほんとは君の方がわるいんだから、こんなこと出来ないんだがね。」

医者は云った。

「手を動かして。」

で、洗吉は、両手を片方ずつ動かしはじめた。事故係は云った。

「これから気をつけないと駄目だぞ。」

洗吉は、腕を動かしながら答えた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com